

感染再拡大でも、「ゼロコロナ」を目指す中国の本気度

2021. 11. 10 西村 友作 対外経済貿易大学教授 日経ビジネス 編集部



北京市内。11月4日、コロナウイルスの検査を受ける前にQRコードを読み取って登録する様子（写真：AFP/アフロ）

10月21日、会食を約束していた北京出身の友人から参加できなくなったとの連絡が入った。彼が住む北京市昌平区の「宏福苑社区」で新型コロナウイルスに感染した疑いのある人が見つかったためだ。その後、新規感染者が相次いで確認され、同エリアは23日に「高リスク」地区に引き上げられた。

中国が目指しているのが、徹底的な封じ込めにより国内の新型コロナ患者を1人も出さない「ゼロコロナ」だ。多くの都市において、予定されていた様々なイベントが影響を受けている。10月末に開催予定だった北京マラソンや、私も審査員として参加を予定していた「日本語スピーチコンテスト」の北京予選大会などが軒並み延期となった。

私が勤務する対外経済貿易大学でも、厳しい管理体制が敷かれ、学内の学生寮で暮らす学生は原則校外に出ることができなくなり、我々教職員も都市をまたいだ移動が難しくなった。

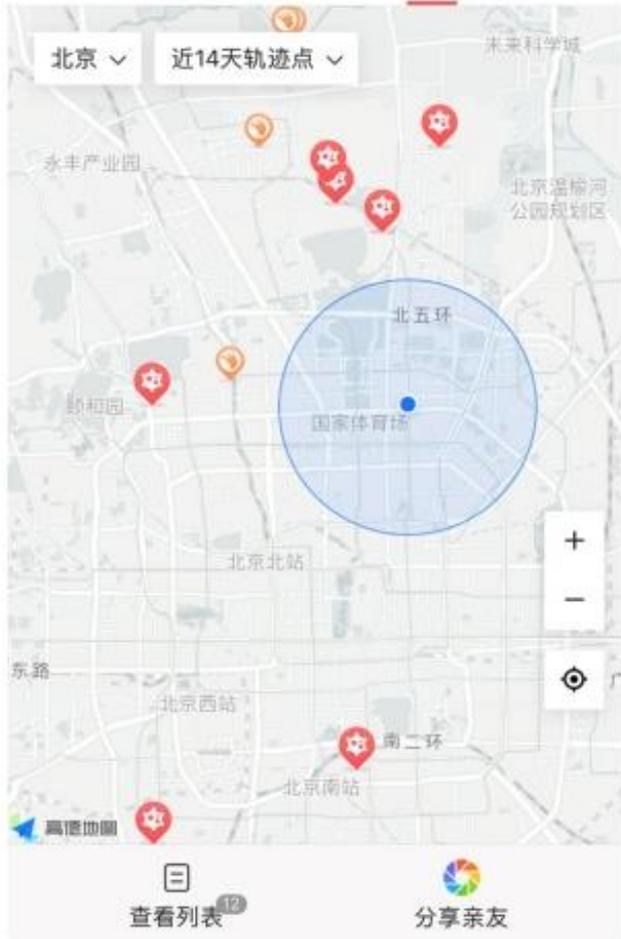
新型コロナの感染状況を気にしながら生活を送る日々が再び始まった。

コロナマップで感染者情報公開

市中感染の拡大を防ぐためには、迅速かつ正確な情報公開を通じ、国民の予防意識を高める必要がある。政府は、感染者情報や病院、交通機関などの公共部門のデータを日々公開しており、それを民間プラットフォームが独自のノウハウで組み合わせることにより、リアルタイムで国民に伝達している。

私が利用しているのが「今日頭条」。TikTok（ティックトック）を運営する字節跳動（バイトダンス）が提供するニュースアプリだ。売りはAIを用いたビッグデータ解析で、日々更新される大量の記事を独自技術で分析し、読者ごとにカスタマイズしたニュース配信を行っている。この「今日頭条」のアプリを開き、「抗疫（防疫）」タブをタップすると、国内外の新型コロナ関連情報がずらりと並ぶ。

国内の感染者情報は、国家および省レベルの衛生健康委員会が日々発表しているデータ



コロナマップで感染者の行動履歴を確認することができる

使ったのか、といった詳細情報を見ることができる。

人員を総動員して実施する「流調」とは

中国では「健康コード」が日常的に使われており、観光地や商業施設などの入場の際にスマホでのスキャンが求められる。これによって、入場時の健康チェックに加え、利用者がどの施設に立ち寄ったかをトラックできる仕組みとなっているが、これだけではコロナマップのような詳細なデータは入手できない。

感染抑制のカギとなるのが「流行病学調査（流調）」だ。新型コロナの新規感染者が発見されると迅速に展開される調査で、感染者がどの時間帯にどこに行ったのか、誰と会ったのかといった詳しい情報が収集される。

具体的には、氏名、住所、家族構成などの個人情報に加え、最近の旅行歴や居住歴、利用した交通機関、濃厚接触者などの詳細情報を、調査員が一軒ずつ回って聞き取り調査を行い登録する。

調査対象者は「高リスク」地区の住人全員。冒頭で紹介した私の友人が住む「小区（団地）」だけでも3万人近い住人がいる。同じように封鎖されている隣接する「小区」でも同様の措置が取られており、かなりの人員が集中的に投入されているようだ。調査を行うのは住人ボランティアで、居民委員会が手配している。

※居民委員会や住民ボランティアの活動については『3日で1000万人PCR』先端技術と

が利用されている。新規・累計・無症状感染者数、濃厚接触者数、死亡人数、完治人数など中国全土の現状が把握でき、諸外国の関連情報も公開されている。また、都市ごとの詳細情報も確認でき、私の住む北京市では、市内15地区の住人に加え、海外や市外からの入京感染者数などが分かる。

圧巻なのは市中感染者の詳細情報だ。感染者の行動履歴、立ち寄った詳細情報を記したコロナマップなどが公開されている。

コロナマップを開くと、周囲5km以内に感染者が立ち寄った場所がいくつあるかといった情報を自動で教えてくれる。地図上には、感染者が住んでいるマンションや立ち寄った場所が示されており、アイコンをタップすると場所の名称や当該感染者の行動履歴が確認できるシステムとなっている。

例えば、「患者58」のようにナンバリングされた匿名の感染者が、「10月12～15日、自家用車で内モンゴル、寧夏、山西などへ旅行」といったように、いつどこに行ったのか、何をしたのか、どの公共交通機関を

人海戦術の中国コロナ対策」を参照。

この情報を基に、「患者」や「濃厚接触者」、「準濃厚接触者（濃厚接触者の家族など）」といったグループに分けられる。患者は指定病院で治療を受け、濃厚接触者は集中隔離施設に移され14日間厳重な管理下に置かれる。準濃厚接触者は7日間の集中隔離だ。

また、「高リスク」地区の住人は全員PCR検査が義務付けられる。友人の「小区」では、敷地内に12カ所の特設会場が設けられ、封鎖初日から5日連続で検査が実施された。その後も定期的に検査が行われる。当然同じように封鎖されているエリアでも実施されていることから、相当数の医療従事者が動員されていることがうかがえる。

「高リスク」地区の封鎖期間は最後に新規感染者が出た日から数えて21日間。私の友人の「小区」では、隔離開始から11日目に再び新規感染者が出たため、また最初からやり直しとなってしまった。シングルファーザーとして小学生の子供の面倒を見ながら奮闘する日々は、もうしばらく続きそうだ。

同じ北京市内でも「低リスク」地区に住む我々は、若干の行動制限は受けるものの、普段とほぼ変わらない日常生活を送っている。その裏には、私の友人のような人々の「我慢」がある。本当に申し訳なく、感謝している。同じグループチャットにいる他の友人たちからも、少しでも彼の生活を支えようと、果物など様々な「支援物資」が届けられている。

封鎖された夜と一緒に飲むはずだった「サントリーウイスキー角瓶」は封を切らずにとってある。封鎖が解除されたら、彼が「もういい」と言うまで痛飲することにしよう。